

## 【論文】

## 幕末期に日本人が訪れ記録した上海像 —納富介次郎と日比野輝寛の日記の場合—

愛知大学東亜同文書院大学記念センター・フェロー  
愛知大学名誉教授

藤田 佳久

### 1. はじめに

本研究は、幕末期に岸田吟香が上海を訪ねたときの研究の前稿として、その直前に、それまでの鎖国政策では迫りくる国際関係状況が息詰まってしまうことを懸念した幕府が、初めて海外、それも清国の上海へ幕府の役人たちとそれぞれの従者として各藩から募集した海外に関心を持つ中堅や若者の武士たちを含めて派遣した時の何人かの滞在記録から、当時の上海をどう見たか、またどう実地に歩いて見聞し、さらに清国人や租界のイギリス人などどう交流したかを見ながら、彼らの描いた記録から上海像を把握するところを目的がある。

### 2. 「千歳丸」の上海行き

徳川時代の日清間の交流は、徳川幕府の国策により、貿易はもっぱら清国側からの取引が中心で、それも日本側では九州の長崎や平戸などに制限され、日本側は受け身であった。そのため、貿易そのものに不慣れであり、ペリーのアメリカやロシアからの開港要求に攘夷で対抗するが、正面からの貿易取引自体無理であり、国際的貿易取引がわからなかったといってよい。そのため、明治維新後、北海道へ水産貿易に進出してきた清国商人に対して、弘前出身で東京の水産講習所を卒業した山田良政は、就職先の函館で昆布取引を担当し、清国商人を介して清国へ関心を持ち、それがのちに清国へ行き、南京同文書院とのつながりへ発展することになったのである<sup>(1)</sup>。少し先走った話をすれば、貿易を視野に入れた幕府から後述する上海への幕府からの派遣船は、長崎の日本の商人も何人か乗船し、若干の品物を選択し、上海で販売しようとしたが、売れず、買ったたかれたりして、結局は大赤字であった。先方の市場調査は全くできておらず、日本人好みの商品を販売しようとしたためである。つまり清国情報はもちろん、上海情報さえつかんでいなかったということがわかる。

そのような背景もふくめて、それまで関係の深かったオランダに仲介を託し、また日本には商船がなかったため、オランダの商船を利用させてもらい、イギリス人の船長はじめ若干の外国人の乗組員を雇った。当然、航海技術もすべて彼らにゆだねざるを得ない形で、幕府主導の派遣というには程遠かった。まさに未知の世界へ外国人の彼らに運んでもらう計画であり、しかし、その実施はあわせてまさに鎖国解放の瞬間でもあった。

このあたりの経過についてはいくつかの先行研究もあり、詳細はそれに任せ、先に進みたい<sup>(2)</sup>。

こうして文久2年（1862）4月29日、上海へ向けて崎陽（長崎）を出港した。以降7月14日までの3か月余りの旅となった。これはその後、元治元年（1864）の2月21日から約1か月半、元治2年（1865）3月25日から約10日余り、慶応3年（1867）1月15日から2か月半ほどにかけて全部で4回の上海派遣の第一回目の派遣であった。第3回は10日ほどと短い、これは長州藩が上海でひそかに船舶売却や武器の調達をしたのではないかという調査のためで、ほかの3回は目的が異なっている。しかし、短期間に繰り返し集中的に上海へ派遣したことは、第1回目の帰国報告により幕府が考えていた以上に上海の国際化や列強の強大さとその進出が見られ、それまでの攘夷思想には限界と危機感があることを実感したように思われる。日本のすぐ隣で一体何が起きているかを実感として早く知る必要に迫られたといえる。この直後の翌年、イギリス軍に大敗を喫した長州藩の例はその危機感をさらに裏づけたものといえよう。また日本の存在を世界へ知らしめる急務から、この時期にパリで開かれた万国博覧会に急遽参加出品したことも、幕府の態度が急激に変化した状況を示している。その点からも、第1回の幕府派遣の上海派遣の使節団はきわめて重要であったことがわかる。

なお、筆者が最も関心のある岸田吟香へのボンと出かけた初めての上海行きは、慶応2年（1866）9月から翌年の慶応3年の4月までであり、幕府の第3回の派遣、使節団の上海滞在期と少し重なる。第3回の幕府の派遣団には絵師の高橋由一も同乗しており、吟香が絵に関心もあったためか、とくに両者は上海の地で蜜に交流している。そう見ていくと、幕府の使節団員と吟香とのつながりも偶然ながら垣間見える。これについては別稿を用意したい。

乗組員は参加者のメモによれば、幕府側の役人と1～2名の各藩から選ばれた従者が組み合わさった組織で、それに長崎商人3人、炊夫7人、水手と水夫が7人、そのほか雇った外国人はイギリス人の航海士や料理人、大工、水夫、船長の妻など14人、とオランダ商人1人、合計日本人51人、外国人16人、合わせて67人の大所帯であった。船は3本のマストがある358トンの帆船で、船の名は、イギリス船アーミチス号を買い上げ、日本名で「千歳丸」（せんさいまる）と称した<sup>(3)</sup>。

乗組員のほぼ半分が幕府の役人と各藩から推薦され参加した従者たちであった。全国の各藩から従者を加えたのは、なるべく多くの藩で広い範囲から参加させ、国外の状況を知らしめたいという幕府側の思惑があったものと思われる。従者に推薦されたものの中には、高杉晋作のようにそのまま国内に放置しておく、血気盛んに攘夷思想を振り回し、それに反対する連中を狙って事件を起こし、国内や国際問題を引き起こす恐れがあると長州藩が判断し、これ幸いと上海へ行かせたというケースもあった。実際、高杉は上海では軍艦や武器中心に関心を持ち、上海の持つ意味を単純にとらえていたきらいが見られる。

幕府役人と藩士の組み合わせを見ると、①根立助七郎御勘定と会津藩の林三郎および佐賀藩の納富介次郎、②沼間平六郎長崎会所調役と佐賀藩の深川長右衛門および肥後の松本卯兵衛、③金子兵八支配勘定と大阪書生の伊藤軍八および高須藩の日々野掬治（きくじ）、④中山右門太長崎会所掛調役と佐賀藩の山崎卯兵衛および阿波藩の桜木源蔵、⑤鍋田三郎右衛門御徒士目付と浜松藩の名倉予何人（あなど）および江戸の木村伝之助、⑥塩沢彦次

郎御小人目付と佐賀藩の中牟田倉之助、⑦犬塚しゃく之助と長州藩の高杉晋作 ⑧中村良平長崎会所定役と平戸の芳蔵、⑨尾本公銅医師と大村藩の峯源蔵、ほかのメンバーで、藩の中では佐賀藩が多く、しかもうち深川と山崎は足軽の身分である。佐賀藩は幕末期に西洋技術に関心があり、足軽であれ有用な人物には見聞を広げさせたということだったのであろう。そして従者の年齢は20歳代が多く、最年少は18歳もいて、その後の日本で活躍できた人材もいた<sup>(4)</sup>。

### 3. 滞在記録を見る

一行の従者のメンバーは、その多くが上海での滞在記録を残した。しかし、上海の水が合わず、体調を崩し、その半分近くのメンバーはほとんど船内や旅館内にとどまっていた。日本側の水夫など3人がコレラなどによりこの上海で死亡している。そのため、(A) 旅館にとどまっていたも、できる限り情報に接し、来訪者からの情報を得ようとした従者もいたし、(B) 体調をくずしながらも時には上海の租界の市街へ出向いたり、古くからの城内にまで足を運んだメンバー、(C) 多少体調を崩したが、積極的に上海中を歩き回って上海を観察し、筆語して上海人と交流したメンバーなど、メンバーによって行動パターンにかなりの違いがある。それは当然、滞在記録の内容にも違いが出てくる。

そこでそのような中から、記録した情報量も多く、上海にきちんと向き合った3人の記録を選び、それをもとに日本人として初めて出あった上海をどう描いたかについて選り出すことができた。

具体的には、(A) に属する記録者の中から納富介次郎<sup>(5)</sup>、(B) に属する記録者の中から日比野輝寛<sup>(6)</sup>、(C) に属する記録者の中から名倉予何人<sup>(7)</sup>の3人の記録を選んだ。今日有名な高杉晋作の記録「游清五録」のうち上海記録は、これら3人のレベルに及ばないためここでは直接は取り上げない。ただしこの本論では、(A) と (B) を中心に検討し、(C) は岸田吟香とともに別稿で取り上げる。

### 4. 納富介次郎による「上海雑記」から

#### (1) 納富介次郎について

納富介次郎については、外山軍治が森鹿三から聞いた話として、森の知人である華北総合調査研究所員の田中西二郎の祖母の兄で、若いころ、長崎で洋画の勉強をし、のちに輸出向けの美術工芸品の文様を学んで成功したという。伝記の中には上海へ行った記録がないものの、本人だろうということだったとしている<sup>(8)</sup>。また、前掲宮永孝は佐賀藩納富六郎座衣文の次男だとしている<sup>(3)</sup>。両者がつながるのかどうかについては、今回調べる時間が不足した。いずれにせよ九州にからんだ人物であり、乗船時の年齢はかなり若くまだ18歳の少年だったように見える。

#### (2) 上海の記録「上海雑記」の中の弁解と努力

納富は、上海へ到着したのち、汚い黄浦江の水を飲んだためであろう、まもなく体調を崩し、その途中で次のように遺憾だとすることを記している。

すなわち、遠く唐土までやってきて、ようやく山川町村にも足を伸ばし、いろいろ見聞

でき、それらの実地を描写し、文にもしたためたりして、調査の一助になれば、お上のために何等か役に立つのではないかと思っただが、到着してほどなく、(日比野の日記によれば、イギリス租界を散歩中、突然腹痛と下痢に襲われ、その後は) 病に伏し、本人の記録では、長らく立ち上がることもできなかった。その後、外へ出る元気も出ず、志がくるってしまった<sup>(9)</sup>とあり、残念な気持ちを吐露している。しかし、その記録は詳細である。それは、そのような中でも、幸いなことに、「上海は辺境ながら賊難に遠ければ、諸方より難を避けて流寓瀬下の多く、その中に書生数多くにて、皇邦は諸外夷と異に聖教を崇び、文字明らかなりと聞いて、楽みて吾輩を来り訪い、詩画筆語等にて自ら親しくなり、聞き出すことも少なからず。」(原文カタカナ)<sup>(10)</sup> だったからだとする。つまり、この時期、太平天国の乱で、いわゆる長毛賊が南京方面から上海へ攻め入ろうとする緊張感のある上海であったが、租界が存在するため安全で大丈夫だと思われる上海へ多くの避難民が押しかけつあった。その避難民のなかの積極的な学生たちは日本人が詩歌や筆語に長けているという評判から、日本人に会いにここへ来たというわけである。納富は居ながらにしてそんな彼らから筆談で多くの情報を学び取るという最善の努力をしたといえる。とりわけ幕臣であり佐賀藩出身の納富は派遣性として選んでくれた幕府や藩の持つ積極性に体調不良でも答えようとしたのであろう。その際、日本側も中牟田、高杉、林、名倉、伊東、日比野なども書生であり、特に筆談は相互交流をすすめたとする。ただメンバー中の中牟田は西洋の学問に通じ、欧米人から技術を聞き取りたかったのにそれが詩文に集中したので気の毒だったとしている。また、五代才助(薩摩)は水手の身分で船底から顔をささなかったが、ときに抜け出し、黄浦江の対岸浦東地区での長毛賊の合戦を覗きに行っていたと、帰国してから知ったとする。

そしてこの稿の終わりに、「此度同船数十人の銘銘見聞せしことを皆集めて大成せば、頗る益あることも多かるべきに、余が微力の及ぶことに非ざるは歎ずべきことなり」<sup>(11)</sup> とし、なお残念がっている。せつかく上海まで来て、現地を余り見られなかったことの無念さであろう。

このように彼の記録は日記形式でなく、全体をまとめ的に整理したものである。とすると、これらの若者たちの記録は派遣団全体をまとめて整理し分析考察することはなかったということであろう。幕府側の役人からの報告で事足りたということであろうか。

### (3) 上海の記録。

では納富はどのような書生たちからの聞き取りによって上海像にアクセスしたのであろうか。それは彼の記録内容からうかがわれる。その主なところを中心にまとめてみる。なお関連する場合は(B)の日比野の記述も加える。

#### ① 上海の港

上陸前日の5月5日、目の前に到着した黄浦江からみる上海については『上海県志』などを用い、その地理的位置と簡単な歴史を紹介している。ちなみに(B)の日比野は「明史河渠志」を用い、明の永楽帝時代にこの黄浦江は出口なく水害が多発したため、江を浚えて海へ出口を切り開いて海とつながったと記している<sup>(12)</sup>。上海到着前にこれらの書をメンバーによってはあらかじめ読んでいたものと思われる。なお納富は自分の目で城北の黄

浦江につながる支流（蘇州川）入口に英人経営の新大橋がかかったとホットニュース的に付加し紹介している。

そしてこの上海の川港について、川幅は約20町、来泊してい列強諸国の船を「蛮船」と称し、その数100余、うち軍艦が14～15艦、地元「唐船」は幾千で数は不明、帆が林立していると驚嘆している<sup>(13)</sup>。

この点は(B)の日比野も同様で、黄浦江に入り西南へ向きをかえると、川幅は一定しないが、突然各国の商館が相連なり、停泊する船の数の多さは例えがたく、南方は帆柱が林立して「尽くるところなし」としている<sup>(14)</sup>。ついでに(C)の名倉も右岸には西洋の商船が連なり、また軍艦の多さを記し、「帆船は幾千万ということを知らず」と表現し、「とりわけ英船最多し。ただし、支那舟の多きは勿論なり」としている。名倉は「唐船」と言わず「支那舟」と表現し、この時にすでに、「支那」というChina起源の用語を用いているのが注目される。名倉はさらに、この活況を、「実に支那諸港中第一繁盛なり所と聞いた故、左も有べきなり」<sup>(15)</sup>といい、前年アメリカへ出かけた同乗者（中牟田）がニューヨークやワシントン以上の繁盛だといっているとの紹介もしている。

ところで、租界の沿岸から離れた南方の黄浦江沿いに尽きることがないと称される多数の船は、いずれも「唐船」で、後述するように、太平天国の乱による長毛賊の攪乱により、各地から避難してきた「唐船」がこの上海へ集中して逃げ込んできたことによるためと思われる。したがって、のちに彼らが江岸を遊歩するとき、多数の「唐船」の船上生活者を目にするのである。

また納富は、江沿いにイギリスやフランスなどの洋館が「立列する」と記し、(B)の日比野も「商館相つらなり」、「陸側は家屋連なり、何ぞ盛んなるや」と驚きを記している<sup>(16)</sup>。

しかし、一行が驚嘆した租界の洋館はまだ初期の低棟の規模であり、その後には高層化していく前の姿であった。それでもその迫力に異次元の世界を見たということであろう。

## ② 上海城

一行の宿舎は千歳丸の船中か黄浦江沿いの宏記館という西洋風支那宿であった。上陸後は早速城内の道台を表敬訪問している。そこは宿からは城内の奥まった西南部にあり、当然城内を横断するように初めて歩き、城内に関心を持ったはずである。

納富は、この上海城が築かれたのは明の嘉靖30年と紹介した後、壁で囲まれた周囲はおよそ1里半、壁の高さ約1丈5～6尺、楼櫓には清の旗と大砲を備え、英仏の軍隊と共同で守りについており、また城門の内外にも西洋と唐の軍人5～6人が小銃を構え、警備は厳しいとしている。城内外を結ぶ城門の数は全体で7口、東に2、西に1、南に2、北に2で、北のうち1つは仏人が新しく造ったとする。いわゆる「新北門」であろう。この指摘で、その結果、それまでの北門は「老北門」ということになったことがわかる。そしてこの時期には、北に2つの門があったということになる。湿地に造られた上海だけに、城内には以前からの排水路的な小河川があり、そのため水門が4つあること、そのほか壁の構造についても示している。ただし、上海は省城ではないため、外郭はないことも指摘している<sup>(17)</sup>。

これについては(B)の日比野もおそらく前述の歴史書によったであろうが言及し、納富

の記したように明の嘉靖年間に町ができてのちの経過を細かく示し、家が増え、店も増え、県も置かれたが、黄浦江の流れが急になり、水難を受けたり、賊の襲来もあってそれらを防御するために城壁を造り、万歴35年に完成したと紹介している。そしてこの来訪時に現地で見ると城壁の周囲40里（清里）、高さ2丈4尺、頗る「堅固なり」としている。そして門の数は6、水門の数は4としている<sup>(18)</sup>。納富とは城壁の高さと門の数が異なる。城壁の高さは場所により、あるいは目測の違いもあったのだろう。門の数の違いは、日比野がまだ新北門に気付はいていなかったほど仏人により城壁に穴をあけ、出来たばかりのことだったということかもしれない。観察者に若干のずれがみられることも興味深い。

しかし、城内は人多く、道路も狭く小さな商店が集積し（日比野は1万店あるとしている）、全体に極めて不潔で汚いと指摘している点は共通する。特に納富は道路には塵糞がたまり、だれも片付けようとしないと指摘している。そして町の外へ出ると、道路は草に覆われ、死人の棺が縦横に放置され、死体も転がり、臭気がたまらないとし、この国の乱政がわかるとしている。

### ③ 濁水問題

納富は濁水によって体調を崩したことで、乗組員が3人も命を奪われたこともあって、滞在中最も困り苦しみぬいたのは不潔な水問題であったことをかなり強調している<sup>(19)</sup>。

すなわち、黄浦江は揚子江とつなげたため、黄泥が入り込み、しかも平坦地にあるため水がよどんでしまう。その上、地元民が犬、馬、豚、羊などの死体、そのほか人の死体を含むすべての汚物をここへ投棄するため、それらが岸まで流れ着いているほどだと観察している。コレラは流行し、難民などは死体を川へ捨てるしかない。しかもそれに加えて住民や数万の船が尿尿を投棄するため、その汚濁は深刻であるとしている。

また、一方、井戸は上海中で5～6本しかなく、しかもそれも極めて汚れている。そのため、黄浦江の水を飲むしかない。その際、大瓶に水を汲みとり、石膏か明礬を入れ、きれいになったと見えるところを飲むという方法である。これでコレラ菌がなくなるわけではなく、悪水がきれいになるわけではない。宿泊先の宏記館もこの水を使っている。だから皆病むことになる。そして納富本人も倒れ、命が危うかったが、中牟田の看護でかろうじて救われたという。

以上から、納富は、今後未知の世界へ出かけるときは、そこの風土をよく知り、注意すべきとしつつ、今後のこのような旅には嘆息するとしている。

(B)の日比野は、5月12日に突然体調を崩し、腹痛と下痢に襲われている。そして同乗した医師からコレラの宣告があり、ショックを受け、節制を誓っている。翌日は伊藤もコレラ宣告を受け、その翌日は金子も甚だしい下痢、15日には死者も出て、病人頗る多し、とある<sup>(20)</sup>。

このように、当時の上海の飲み水の環境は極めて悪かったことがわかる。それは西洋人にとっても同じで、この後、英、仏ともにそれぞれの上水道の水源地を捜し、のちに上水道施設の充実へ向かい、やがて現地人もその恩恵を受けることになる。

### ④ アヘンの浸透

上海で目立つ清人の風習はタバコ吸いであり、それが近年はアヘン吸いの増加になって、

あらわれていることも指摘している。

タバコにはよじった紙に火をつけ点火するが、西洋人の真似をした鼻タバコが流行っていて、粉末を指先に少しつけて鼻から吸う。日本にはなく、納富自身も試みたという。

そしてタバコ好きの清人の間に、近年アヘンが広がり、官による禁止も効果がないほどだとしている。まず役人が吸っており、庶民に禁止しても庶民が守るわけがないと指摘している。清人はアヘン煙は気持ちがよく、心や気持ちが落ち込んだ時や疲れたときに精神ともども元気になるという。したがって、やめることはできなくなるが、吸い始めて後、1か月でおかしくなり始めるのに、それをやめる手立てがないとする。たとえば、7月5日に蒸気船工場見学へ行く時に、30歳ほどで英語もできる水先案内人に仕事回数と賃金を訪ねると、80元だと答えた。かなりの賃金なのに、服装も体も貧弱で、独身、酒も女色もしないという。その理由を尋ねると、もっぱらアヘンの吸煙だけに没頭し、賃金も足りないほどだと答え、我々はそれを信じられず、その吸引姿を見ていると、そのうち臭いはくさくなり、吸引をやめさせようとしたが、耳をかさず、ついに目もうつろになり眠り始めたので、中牟田が大喝して、刀に手をかけたならその案内人は驚き、あわてて道具を片付け始めたことがあったという<sup>(21)</sup>。

そのため、アヘンの広まった清国軍は、敵の接近にも気付かず、戦闘中も吸引を余儀なくされるため、戦いに敗れるという清人の話も記している。

#### ⑤ 来訪する人々

納富は途中から病気で伏し、外へ出られなかった代わりに色々な清人が来訪したことは前述した。日本人への期待を込めて多くの若き書生たちが来訪してきたことも述べたが、そのことは日本人なら書画がわかるということで、書画や書籍、さらに骨董物を持った商人たちが次々と来訪していることも記録されている。これはほかのメンバーにも共通するが、納富はずっと部屋にいたため、訪問先として狙われ、閉口するときもあった。山崎、深川のように資金も多く、かなり書画などを購入したメンバーもいたので、それも来客を増やしたのだろう。その際、真贋をめぐる駆け引きが重要であったようだ。納富も結局、15点ほど購入している。

そんなあつるとき、避難民の書生が古い一木硯を買ってくれと来訪してきた一件を記録している。不要と断ったが、生活苦で母が危ないなどと悲惨な話を聞き、高値にして買ってあげた。すると翌日、価値以上の金をもらったので水晶の印材を受け取ってくれとやってきた。それに及ばないといってもどうしてもというので受け取ったが、貧しいのに、その心と気持ちに感心した、というケースも紹介している<sup>(22)</sup>。

#### ⑥ 清人や上海人の性格と日本人への視点

ということで日が経つにつれ、清人との接点も多くなっていく。そんな中でお互いの性格もわかるようになり、特に彼らがこの一行や日本人をどうみているのかということも記録されてくる。

当初は一行が到着し、船や宿から出ようものなら、ものすごい群衆が一行やメンバーを取り巻き、歩けないほどの日々が続いた。程度の差はあれそれは帰国するまで続き、扇子で顔を隠したりして歩くメンバーや夕方歩くメンバーもいた。特に、日本人武士の髻姿に

清人は指をさして大笑いし、また日本人は清人の弁髪を見て大笑いして、お互いに笑いころげるといふ交流があった。そしてすぐ清人が日本人の着物に触ったり、刀に触れようとする好奇心の発露もあった。

このことはお互い初めて見る相手への好奇心であると同時に、のち納富を来訪した清人のある医師は、今度の長毛賊撲滅のためにイギリス人は、東洋（日本）の援軍を期待した。そこで皆は日本の軍艦がいつ来るかを期待して待っていた。その日本の兵の中には1日千里を往復し、また水の上さえ歩く兵もいるという噂があって、それで日本からの船の到着や乗組員を見ようと雲集した面もあったと聞かされている<sup>(23)</sup>。いわば日本は秘術の国と思われてもいたのである。

また、納富は上海の人々は初めてやってきた我々に西洋人に対するのと違って、旧知のように親しんでくれ、筆談で議論さえできたこと、上陸のとき、子供たちまで手をつなぎにやってきたことなどから、日清の人心が自然に通じあったと思えたとしている<sup>(24)</sup>。そして多くの主に避難民の中の学生たちが積極的に一行を訪ねてきて、筆談で議論をして多くの知恵を一行から学び取ろうとする姿も予想外のことであった。そして多くの文人や書画や書物を持参してくる商人は、日本人一行がその面でのインテリ層であることを認めていたといえる。

これらのことは、(B)の日比野の記録のみみられる。当初の5月7日に上海道台に訪問の挨拶に出かけて、珍しい儀礼と接待をうけたあと、通訳が日比野に道台が日本人を「日本国は格別の国にて礼儀正しきを感じし」、「わが国人を甚だ恋う趣なり」と評したと伝え<sup>(25)</sup>、日本人一行に対する評価が高かったことがわかる。概してこの一行は大いに清人、上海人から歓迎されたといえる。

一方、日本人が見た上海人、清人に対する見方は、納富によれば、前述のような親日的な彼らであると親しみを感じながらも、しかし、近年は、5～6歳の子供から商家の子供も教師をつけて学ばせる気風が見られるとし、しかしながら、今やその志は自分の利益のことだけで、もっぱら科級の試験合格のためにだけに金を使うことに夢中だとする。かつて清国は文学ではどこにも引けを取らぬ国で、それが国を治める原理になっていたのに、今やついに自分の国を治められなくなっている。しかも内では長毛賊に苦しみ、外からは夷狄による制を受け、清国は危うくなっていると指摘。憐れむべきことだとし<sup>(26)</sup>、内乱と列強下の上海において肌で国際感覚を感じ取っている。そして別の個所で次のようにも述べている。

「上海は素より俗地にして文事などを弄するもの多からず。偶我旅館に来たり風流の交わりをなすは、みな難民中の人にて、その中には秀才もあって、身長の衰政を哀み頻りに皇国を慕い、余に言いて曰く、現在多くの難民去って貴邦の長崎にありと。古もまた有之。貴邦はもとより仁義の国と知る。而して我邦とは唇齒に均し。若し諸侯に於いても我邦を憐れんで倒懸の苦みを救い、召してその民となしたまわば、長く恩沢をこうむり安居することを得ると、坐ろに涙を浮かべれば、余もまた哀憐の悲に堪え坐りき。因て思う、若しこれ等を救い、皇国の民となさば、百工のなすところあって自ら国益ともなり、また農民などには海島山林を開かしめ、器量ある者は挙げ用いて宜しかるべきに、賊乱に苦しみ

て空しく餓死せんといたわしくも又惜しむべきことに非ずや。」<sup>(27)</sup>。

清国のいわばインテリ層の嘆きが日本に救いを求めていること、それに共感する佐賀藩出身の納富の自国愛が、日本という国名がありながら、佐賀藩出身ゆえに皇国という用語を意識的に用いたのかということ、またこの混乱期に長崎へ避難した清人が多いことなど、興味深い内容を含んでいる。

#### ⑦ 長毛賊と上海

派遣団一行が長毛賊の存在を知ったのは、早くも黄浦江に差し掛かった船の中で、陸上に火の手が上がり、長毛賊の攻撃によるものだという説明がなされた時で、その後も火の手が上がったり、砲撃の音が聞こえたり、郊外で戦闘があったりと上海がほぼ彼らに包囲され始めた状況も知った。その7～8年前には小刀会が城内を占拠したこともあった。ひょっとして市街戦が始まるかもしれない危険な時間と空間へ入り込んだといえる。現代であれば、その情報は詳しく入手でき、この派遣は中止されていたに違いない。しかし、逆にその緊迫した上海とその周辺を肌で知り、国際都市と内戦、そしてそれにかかわるようになった英仏の軍隊、さらに上海へ避難してくる10万人ともいわれる避難民の存在という混乱の中の、嵐の前の一瞬の静けさを味わうという貴重な経験をしたわけである。当初は中立的立場をとっていた英仏軍がそれまで敵対していた清軍と共同で、際限なく暴徒化しつつ上海へ攻撃を仕掛けてくる長毛賊に対抗するようになったのがこの時期で、戦闘の血なまぐさい情報が新聞や人の話から日常的になっていたことが記録の中からうかがえる。

最初に城壁を見たとき、イギリス兵がそれを警備しているのを知って奇異に思い、清人にその理由とそれをどう思うかと尋ねると、相手は答えず、黙ってしまったといい、長毛賊が上海を攻めてきたとき李鴻章の軍隊は遠郊にあって、戻れなかったこともあって、実は上海の防禦を英仏軍に頼んだためこのような体制になったという話も聞いている。このような度に英仏は租界を拡大したりもしている。話は少し変わるが、それより前、天津の戦闘で英軍に敗れた清国は、その賠償金を払うため、上海にある貿易海関の管理をそれまでも協力はしてもらっていたが、英に完全に移管し、その関税収入も英の収入になるようになったことも確認し、記録している<sup>(28)</sup>。

納富はこの長毛賊は明末にその名が出てきているとし、今は天主教により清人たちを愚民化させ、従わぬものは殺し、賊徒や農民を兵に充て、乱暴狼藉をするのみだとしている。実際10万人もの人々が上海へ避難してきたということは、それを裏付けているのであろう。この賊軍は将が戦死したりして、規律も秩序もなくなっているとしている。それなのにこの勢力が広い範囲で力を持っているのは清朝の衰微と暴臣政によるものだとし、もし仁政を施せばこのような賊匪は滅びるはずだとも指摘している<sup>(29)</sup>。

なお、納富は天主、福音両教が各地で啓蒙活動をし、特に医療活動は清人の支持を受けているが、治療の成果は医学によるものではなく、天主のおかげだという形で布教していることなどにも言及し、キリスト両教が今や伝統儒教を上回っていることについて、清人と議論し、日本はそれを認めていないことを伝えている<sup>(30)</sup>。

## ⑧ そのほか

納富はそのほかにもいろいろ言及している。それらはかならずしも系統だっているわけではないが、説明は説得的である。同乗した高杉（24歳）らの言葉から、納富は彼らよりは若いとされており、宮永孝によれば実際は弘化元年（1844）生まれ<sup>(31)</sup>、おそらく18歳のまだ少年だと推測され、若くてもすぐれた人材が抜擢されたと評価できる。のちに東亜同文書院生がちょうど20歳ほどで清国の長期にわたる現地調査報告をまとめていて、選ばれたとはいえ、当時の若者にはかなり力があつたことがうかがえる。その力は書院生とも同等のように見える。納富は滞在の大半は病床にあっただけに、むしろ来訪者や新聞からの情報を落ち着いて目と耳を研ぎ澄まして入手していたと思われる。記録も時に資料を用いて説明するあたり巧みで、より若い目による真摯な取り組みは、全体の内容では帰国後有名になった高杉のレベルを超えているように思われる。

ちなみに、そのほかでは、清の役人とその階層、宗教、婦女子、貨幣制度、農産物、魚やと魚種、紙、竹、刀、夏の氷、植生、学校制度、物価、畳、オランダ館、フランス館、滞在中に日本の伏見の異変を知ったことなどの情報が読み取れ、これが病人の書いた記録かと思われるほど多彩多様である。そこに初めての海外経験を日本人の代表として少しでも広く見聞したいという意欲と責任、そして自負心を垣間見みることができ。ただし、室内が多かったせいか、少し町を歩いてはいるものの、町の中で思考する空間認識として情報をまとめる部分は弱かったといえる。

## 5. 日比野輝寛の上海日記「贅臈録」（ぜいゆうろく）<sup>(32)</sup>

### （1）日比野輝寛

日比野は、伊東軍八とともに金子兵吉支配勘定の従者として同乗した。出身は美濃国（岐阜県南部）の高須藩。木曾川沿いの輪中地域の藩で、木曾川を超えて美濃側へ張り出した尾張藩に隣接した。その高須村の高田藩士の家に天保9年（1838）に生まれた。のちに養子で日比野家に入った。名古屋や江戸でも学び、上海行きに参加した。参加した時の年齢は24歳で若く、高杉と同年である。帰国後は名古屋明林堂の教授、のち大蔵省でも務めた<sup>(33)</sup>。

### （2）その上海日記

日比野の上海日記は「贅臈録」というタイトルである。贅臈とはイボのように役立たないという意味で、謙遜した気持ちを表現したもの。高須藩という小藩を意識してか遠慮風だが、内容からみると、作品は自信に満ちており、レベルも高い。その点では小藩出身だがほかのメンバーには負けない意欲がタイトルの表現に表れているといえ、自信の裏返し表現だと思われる。

内容は本格的ともいえる日記体で、滞在中の毎日の様子を体験したことを中心にかなりの確に記録していると判断できる。しかも単なる見物ではなく、関係者にきちんと質問し、筆談ではあるが、議論もして積極的な調査を行っている。極めて好奇心旺盛な様子が見え、途程、少しコレラで中断するが、かえって後半はそれを挽回するかのよう、別稿で取り上げる名倉ほどではないが、町一帯を歩き回ったりしている。空間の広がりも頭

に入れながら上海をとらえようとする心構えも見える。最初に示した (B) タイプのすぐれた記録だといえる。

① 上陸<sup>(34)</sup>

揚子江から入った黄浦江へ入り込んでいく時は、納富のところでも付加的に説明したように、彼は事前に見ていた『明史河渠志』で歴史的な黄浦江のことはすでに理解しており、現場では確認するだけで、河川の地図まで作成している。流域の村落や樹木を観察し、麦がまだ細青く、堤の上に牛が遊ぶのを見、漁業の網は日本の四つ手に似ているなど、農村出身の観察力が生きている。

陸の家や壮麗な商館群も記録し、上陸時にオランダ船が役人や清人を乗せてきたので、同乗していた「唐人」にすぐ質問し、昨日船から見えた四方の火炎について筆談をして尋ねている、そして近くの鎮で戦いがあったことを早くも知るのである。そして清国の官吏については書生ではなく実質的には商人だとしている。今の中国に通じそうである。理解は早い。また、別の2人に問うて、上海の現在の西洋船は100隻余、「唐」船は3000余隻と聞き出している。ほかのメンバーが万余だと記録したのとは大きく異なり、実数が示されている。このあたりの要領と正確さを求める姿勢がほかのメンバーとは異なっている。そして、夜になって「数千の船みな一灯を点じその景佳なり」と余裕である。

翌日、5月7日の午後、いよいよ上陸するが、そのさい掲げた「我が国の日旗（日章旗）映じ、数千の蕃船を輝射するごとし」とは目に浮かぶ光景で、彼のやはり余裕である

こうして杉板（伝馬船のこと）でいよいよ上陸し、「岸から少し離れた蘭館」へ。「その宏大さ極まる」と記している。これは點耶洋行と称され、「この江岸の南北には商館が比隣す」と記し、そしてここでも西洋館は130～140館という数字を聞き取っている。以上の「」部分は空間的基礎認識である。

そして宿舎予定の西洋風唐人旅館の「宏記館」へ到着。各国人が投宿し散ることも見ている。この日は宿との滞在契約を行ったのみ。そのあと、「左折して」市街へ。つまり入口を出て北側のフランス租界の町へ向かったということがわかる。たちまち数千人に取り囲まれ、炎天下一步も進めないくらいだったという。(A) の納富のところでも見られた部分である。おかげでゆっくり歩いたので各店がよく見れたという。無駄がない。その際、集まった群衆はほとんど男で、この国の男と女の差に早くも気付いている。そして千歳丸へ帰っている。

またその日の「新報」を早くも読み、農村の農民たちが戦を嫌って上海へ来るが野宿に苦しんでいることを知る。そして仏兵が賊を探しても見つからないという情報に、なぜ清国兵は探さずに仏兵に頼るのかとの疑問を持っている。そして奸商が賊と取引して儲けていることも知る。西洋の兵が奸商の船を調べたら西洋人が2人乗っていたことも記し、ここでも清国官吏はなぜ調査しないのかという疑問も持っている。日比野は早くも清国の中の不純な点に多くの疑問を持つことになったことがうかがわれる。

② 上海道台への挨拶<sup>(35)</sup>

次の8日は蘭館からオランダ人の道案内で上海の道台への挨拶。前述したように、この旅はオランダが仲介したことがわかる。道台の場所は、城壁に囲まれた城内の中でも蘭館

から見ればもっとも離れた西南部にある。そのため、日比野には城内を横断し、まちを観察する絶好の機会となったはずである。まずは豆腐屋、髪結店、関羽の絵などを観察し、日本とあまり変わらないが、店はほとんど男ばかりだとここでも男女差に気付いている。蘭館からは全員が肩輿に乗り、いよいよ城壁の東側にある小東門をくぐり城内へ。狭くて汚く、多くの群衆が集まり、一行の騒ぎを見て大笑いする。そして門を入ると砲音と笛、鐘でにぎやかに歓迎され、下乗すると道台が出迎えてくれた。日比野は道台の衣装や冠を細かく記している。とくに冠の上さ珊瑚の珠、後ろに鳥の羽が飾られ、これらが地位を示すことにも注目している。そして相手側が礼服で迎えてくれたのに、一行が平服だったことを恥じている。

なお、酒や菓子でもてなされた後、その残りを道台の官吏たちが懐へ仕舞い込んだのを見て、風俗の乱れだとして日比野は嘆いている。観察は細かい。

帰路も笛の音に送られて門を出るが、またしても群衆に取り囲まれ、通りを開けるためにムチを振り上げたりしたという。しかし、途中、磁器店により、珍しい器を早くも購入している。積極的である。

### ③ 宏記館へ<sup>(36)</sup>

こうしていよいよ5月9日から陸上の宿舎「宏記館」での生活が始まる。外国人の宿泊者もいて活気があるとす。しかし、翌日、フランス人を見て、その容貌は甚だ異で、顔は鬼のようなので、清人に聞けば彼は耶蘇教の宣教師だといひ、日比野はそれを知ってさらに愕然とした、と記している。聞けば上海に耶蘇教の教会は3か所。長毛賊ももとは耶蘇教の宣教師たちによるものだと知る。とするとこんな大乱を起こしているのになぜ清国は耶蘇教を禁止しないのかとまた疑問を持っている。フランス人宣教師の鬼のような顔を初めて見たショックが隠せない。

再び9日に戻る。宏記館の2階に日比野を含む4人が宿泊することになった。天井は高いが壁に囲まれ暑い部屋だという。その1階には店があり、江戸扇子、鳴海紋、色糸、浅草ノリ、ひな人形、漆器、などの日本品が西洋の玩具類とともに売られていることを記している。日本船が貿易する前からすでに清国側による貿易でこのような日本品々が揃えられていたことを日比野は観察している。このような品々を通して、清人やここに泊まる西洋人は日本をすでに理解していたことがうかがわれる。なお、同じフロアーに野菜売り場もあり、茄子、葱、大根、菜、ささげ、胡瓜、冬瓜などを見て、日本と大差ないと認識している。これらの観察は納富のように室内で大半を過ごしたメンバーには観察できないことである。なお、肉屋は牛、羊、豚の肉を扱っているとしている。

2階へ戻ってからも日比野の好奇心は衰えず、世話係の張棟香に、上海では井戸が少ないのはなぜだ、また松江、青浦まで賊が来ているというが、どこまで来ているのか、について尋ねている。それによると、前者の問いに対しては、黄浦江の水に明礬や石膏を入れてきれいにするから井戸は多くは不要と。しかし、日比野はその水でお茶を煎じ飯にそそぐと青色に変わり、食べられないと記している。後者の問いに対してはアメリカと清国軍が賊を追い、死傷者が沢山出たこと、しかし西路の敵は勢いがよく、こちらは上海で兵を募集するほどだ、と緊張感がつたえられている。

10日から11日にかけて町へ出かけている。まず近くのフランス租界の骨董屋、本屋へ出向き、本が安いことを特記している。11日はイギリス租界へ出向き、中心街とはいえ何とか通りらしくなった頃だと思われる馬路を堂々と歩いている。当時としては広い馬路だが、相変わらず数百人が後をつけ、天公（かさ）をとるとみな指さして大笑いする。大騒ぎでにぎやかな歩きであったが、いささかそれに得意になったりしたかもしれない。そんな中で、ニュースも得ており、近くの湖城が賊の手に落ち、城主は死亡、兵と民の数万人が餓死したと聞いている。上海の外は賊が支配している状況を認識したということだろう。

このように、せっかく調子が出てきたと思ったとたん、5月12日に腹痛と下痢に襲われ、同行した医師からコレラと診断され、16日まで部屋から出られなくなっている。(A)でも示したように、伊藤や金子もダウンし、ほかにもダウンしたメンバーが多いという。14日には船乗り1人がついに死亡したことが伝わり、ずいぶん緊張したことであろう。水のせいだとし、自制を自分に言い聞かせている。しかし、病床中にも「新報」から戦況のニュースを取っており、無駄な時間を過ごしていない。これは前述した納富もそうであった。西路では賊との攻防で賊は西北は退却、常勝軍は青浦で戦闘中で南門に迫ったこと、松江の賊は英清軍の進軍で退却し、上海西部は安静化、一方、南京も清兵が4～500隻で攻め、賊の英王が投降したことなどで、やや英仏軍が、戦況が賊側に不利な状況になりつつあることが伝わってくる。筆談ができる彼らにとって、新聞は容易な情報源になっていたことがわかる。

④ 増える来客、ときに訪問<sup>(37)</sup>

しかし、部屋で滞在することになったことは、日本人に興味を持った清人たちには絶好のチャンスとなった。

15日には午後、早速施熊という人物が「戦国策」の書をもって来訪している。避難して上海へ来たという。筆談すると文才のあることがわかり、詩を交換することになっている。日比野にとってはじめての清国文化人であった。そのあとも顧麟と顧鬻という兄弟が来訪した。上海南馬路に住むという。これも詩を交換することになり、この兄弟とはこの後も交流が続くことになる。そして倒れてから初めてこの夜、城外で江岸を散歩し、月空と清風を味わうが、帰館した後、思い切り蚊にさされている。蚊が生息する環境であったことは納得できる。

翌日は、張林香と許霍生という2人が書画軸を持参してきて慰められたとする。商人達だが、彼らから長毛賊の情報も得ている。

そしていよいよ17日に外出。名倉、納富と15日に来訪した顧兄弟を馬路に訪ねている。兄弟の詩に感心し、たがいに交情ができたが、納富が体調を崩し宿へ同行。そのあと名倉と市街地（租界）及びその外へ足を延ばし、避難民の貧苦の生活を見る。その後、城内へ入ると名倉は立ったまま通行人と筆談を交わし始めた。名倉の情報取得のワザがもっと上手に見えたのだろう。そのあと別れて一人で本屋を探そうとすると、花街へ連れて行かれ、すぐ帰館している。ここでようやく本格的な街歩きが始まるが、これについては、後へ回すことにし、押しかけるようになった来客を先にみてみよう。

以下来客を見てみる。

5月19日には、突然、施渭南が再来訪し、詩稿などを持って来るが、予定外だったので筆談せず、次回へ。そして午後、5人の商人が筆や炭を売りに来るが、とくになし。

5月20日には顧兄弟が詩文を書いて持ってくる。茶菓と酒を出し交流。午後、謝公桓が子連れで自作の書を書いた団扇を持って来る。

5月21日、再び謝公桓が依頼していた絵を持参する。筆談で交流。

5月25日。張棟秀が学生を3人連れてくる。筆談したが、雑談だけで。文章を論じることなく、レベルが低いとみた。

5月26日、顧麟が来訪。文事話はやめにして俗情について話す。顧麟には信用ある親友となったようだ。

5月27日、再び体調を崩し、腹痛と下痢に悩む。このあと6月1日まで記録なし。疲れがでたのも加わったのだろう。日比野には深刻だったように思われる。理由は濁水だとし、体力の消耗を心配している。

6月2日、病床を離れたが、この間、学生4～5人来訪し、日比野の病状を尋ね、薬まで持参してくれた厚情に感謝している。

6月3日は病後初めて髪を結び、外出。顧兄弟を訪問。弟は重病だと知る。顧の父は日比野が訪問したことを喜び、昼飯をごちそうになり、材料は日本と変わらないとしているが、食器や箸には注目している。この食事のときも男女は別々に食事をし、女は奥で食べるのを確認。なお腰につけた日比野の日本刀をめぐって議論になり、抜いたときは虎が吠え、猛獣が倒れると伝えると。顧は顔色なしになったと記している。

また馬栓が宿へ来て、日比野の食事を見て、なぜ淡泊なものばかり食べるのかと問う。それに対して材料は日本と違わないが、油を日本ではこんなに使わないと答えた。食事の差の確認である。

6月5日、漁民がウナギを売りに来て購入し食べた。また1階に来た王士偉と筆談し、議論して彼を怒らせ面白がっている。

6月6日、大勢の商人が来て、さすがにその応待がいやになる。ますますこの一行に上海の商人までが関心を持つようになったと言うことだろう。

6月8日、この日また体調不調。

6月9日、施渭南が詩文を持参。施は文才があるが、やたらに書を求めてくるところは軽薄な人物だと評価している。それでも2～3張をお返しに渡している

この後、学生2人来訪。筆談すると、旅の途中に教えを受けに来たのだという。しかし、馬栓が間に入って学生たちにやたらに学を論じるなど邪魔をする。こういう議論をしながら旅をする学生が名声を聞いては人を尋ねるといのは、日本の当時と似ているように見える。ただし、彼らはアヘンらしきタバコを吸っていた。日比野はすすめられたそのタバコを吸うのを断っている。

画工の謝公桓もやってきた。茶店へ行き、酒を飲み、郊外を歩こうと誘ってきた。しかし、自分は国家のために来ているので、そういう飲酒には乗れないと断っている。日比野の姿勢がうかがわれる。

また、本屋の志雅堂が書籍や本を売りに来ている。あとの来訪者についてはは文武生以外は断っている。

6月10日、常州府の奨学生、尤克勤という学生の来訪があったが、自分の体調不良ゆえ、次の機会に会うことにする。

6月11日、春舫が従者1人と来訪。その従者は長毛賊にとらえられたあと先月蘇州から来たという。しかし当人は筆談ができず、日比野は残念がる。

6月12日はなんと未明から商人が続々来る。評判を聞きつけたのだろう。彼らの情報ネットワークのつながりがうかがわれる。日比野は彼らを叱り、部屋へ入れず。また、春舫が来て江蘇へ帰るといふ。詩の交換を決める。続いて施渭南も来る。詩の贈答をしている。さらに尤克勤まで来訪。日比野の詩文を論じあったが、まとまらなかったとする。

6月13日未明より、施渭南、馬栓、春舫、尤克勤、それに学生2～3人来訪。ますます人気ものになった感があるが、これだけ来るとさすが筆談も大変で、部屋も暑く、外の欄干のところで涼みながら、また部屋へ戻ったりして交流したという。

6月14日、春舫来る。頻繁に来るので、笑うしかない。そして公役が来て、大村藩出身のオランダ通訳の弟がなくなったという知らせをうけ、同情。

6月15日、江西永新懸科挙人の華翼綸が7人の従者を連れて来訪。華は兵7万人の大將で勇敢な人物。長毛賊と40戦もしている。文才があり、筆談もスムーズ。最近上海へきて李鴻章と会い、負傷兵の見舞いをしていたら、日本人がきていると聞いたのでやってきたのだという。ただし、軍事については話さない。そこへ周士錦と華翼綸も加わり、情を語りだす。茶を出し歓迎。日比野を軸に大きなサロンができたといえる。そこへ施渭南が連れてきた初めてみる3人と会う。うち一人は知府の葛雅侯で位が高いという。もう一人は学生。しかし、この知府は文才がないと日比野は見ている。そこへ春舫も参加、ぶどう酒も出て、より大きなサロンとなり、日比野はその中心人物として評価されていたことがわかる。

6月16日には華翼綸、午後は顧麟が詩を持参し、雑談。そのあと春舫が友人1人連れてくるが、それは断っている。本来なら市街へ出るつもりが、来訪客で、出られなかったとしている。

6月19日、華翼綸と周士錦が印材を持参する。興味があったので茶菓で応対し、筆談。手元の錦画を渡す。

6月20日、顧麟が来訪。しばらく浦東へ行くというので、お別れ。午後、また体が不調。

6月21日、周士錦が見舞いに来る。情報は早い。

6月22日、銭仲彝が従者1人と病床へ来訪、詩経に詳しく、学力優秀。学校制度を教えてもらう。扇子ももらい、午後も居続けたため、公役が夕方帰させる

6月23日、漁民が鰻を売りに来る。美味だったと。周士錦が見舞いに来る。その厚情に感謝し、ついでに洋夷について問うとそれについては語らず。秀才。

6月24日、本屋の志雅堂が書籍を持参。数冊求めた。

6月25日、李步瀛が周士錦の紹介で詩を持参。古今の話へ広がる。また、瞿光芮と葛桐金が依頼していた詩を持参。逆に詩も頼まれる。のち知府の葛雅侯が扇に書を書いてく

れと所望してくるので、了解。いずれも詩文や書の交流が上海の文化人と日に日に深まっていって様子が見える。午後、厨人が食事を持参。

6月27日、抜錨が近づき、やること多しと記している。この日も周士錦と李步瀛が詩を持参し筆談。夕方、藿光丙来訪。暑さに疲れているところへ学生達3人来訪。江南や淮南、渭水の出身で、上海に日本人がいるとの伝聞があり、訪ねてきたという。しかし、疲れてしまい、残念ながら、再会を約束した。

この日の記録で日比野は、上陸当初は格別の人物が相手だったのに、今や「益友」に富むようになったとし、もし、もう1年滞在できるなら自分の「寸志を達する」ことができるのにと、帰国が迫るなか、残念な気持ちを吐露している。それにしてもほとんど初めてである日本人に、それも20代前後の若者に対して、多くの学生も含む清人が、はるか遠くからも詩文や学問の交流を求めて参集したことは驚くべきことである。混乱する清国状況の中で、秩序と学問を備えた日本人という風評が、憧れとともに清人の間に急速に広がったということと、この国の見えない情報の速さをうかがうことができる。

6月30日、厨人が湯薬を持してくれる。そして午後、道台へ別れの挨拶に行く。

7月1日、いよいよ午後には帰国船に乗る予定。すると、朝食事に早くも顧綸が百字韻を持参し別れに来る。互いに涙にくれ、来春に崎陽で会おうと別かれる。その最中に本屋の志雅堂が依頼していた書を持参してくる。さらに周士錦、華翼綸も別れに来てくれ、「愁傷の気分」になり、「その厚情、実に竹馬の友にまさる」と記している

7月2日、船中で鬱々としてしていると、漁民が鰻を持参してくれる。お互い大声を出して食べたことと記している。滞在中、漁民から鰻をたびたび求めており、漁民からも好かれていたことがわかる。これが上海との最後の別れになった。

日比野は、これら多くの上海での清人との付き合いで、国際人として成長したに違いなかった。

#### ⑤ 町歩き<sup>(38)</sup>

日比野は、上海の古くからの城内に加え、イギリス、フランスの租界についても町歩きをしたがったことは、当初の行動記録からもわかる。しかし、濁水のせいでコレラになり、前述した納富ほどではないが部屋生活も余儀なくされた。しかし、以降、体調を見ながら町歩きを試みている。しかも増え続ける多くの来客にも対応しての制約された町歩き時間であった。

体調が回復して、納富と市街へ久しぶりに出たのは、5月17日で、途中納富が急に倒れたこと、名倉がどンドン聞き取りをするのを見たことまでは前述した。

その翌日、18日には今度は中牟田と江岸を歩き、長さ4～5間くらいの大きさで、婦女子も生活している船が連綿とつらなっているのを見、それらがみな乱を避けて来ていることを観察している。そしてより岸沿いには魚屋が店を連ね、塩魚、星魚のほか、生魚では、スッポン、ドジョウ、コイ、スズキ、など日本と変わらぬ魚種を記録している。あと城内へ入り、書店行きを子供に案内させ、本の多さに関心。本屋で茶を飲んだとたん、腹痛となり、少年に厠を案内されている。そこで上海では馬桶で用を足し、日暮にそれを黄浦江で洗うことから、黄浦江が汚れることを実感している。再び、本屋に戻り、莊子などの本

を3冊購入、そのあと歩いた道路は石敷きだが、人が多く、泥が積もり、両足が汚れたと。

5月20日には、来訪者の後、イギリス租界の大馬路まで出かけ、本屋の志雅堂へ出かけるなど、少しずつ足を伸ばしている。しかし書店内にいても次々と書画や磁器を売りつけに来て、笑うしかなかったとする。商人の売り方の様子がわかり、それがやがて病気中の宿まで押しかけてくるようになったこともうかがえる。しかし、この志雅堂とはこの後も付き合いが進むことになる。

5月21日、夕方、仏館から江岸を歩く。1人に粗末な家に案内され、書画軸を買わないかと言われそれに魅せられている。しかし、この後、再び腹痛と下痢により歩けなくなり、部屋でもっぱら前述のように来訪者と付き合うことになる。

6月7日、ようやく出歩けるようになり、この日はそれまでの我慢を一気に取り戻すかのように、城郭を一周するとの意気込みで、清人を案内役とし、朝早くから宿を出発している。

まず、江岸沿いに城外を南下し、南門外の潮州会館前へ。その途中で野菜や煮物のアワビなどの海産物を見、南門外では道狭く、臭気のすごさを感じ、米、綿、油屋がそれぞれ住所名と番地を掲げて商売している様子を観察している。そしてそこから西南方向へ城壁から離れ、李鴻章撫軍の陣営を目指している。途中、時々兵卒に会い、陣営が近いことを知ったが、途中の農村では胡瓜、茄子、唐黍、夏大根、冬瓜、大豆、ササゲ、紫蘇、藜（あかぎ）など日本と変わらぬ野菜畑を見ている。そしてその先に死者の棺や死体が多数放置しており、臭気も強い墓場を通り、陣営へ。ここは軍の操練を見ることを約束していたのに、病のため、見られなかったところで、外から覗くだけであった。そのあと北上し、斜橋付近の5～6軒の民家の中、昨年賊に占拠され、すべて持ち去られたと古老からききとっている。城壁の西門に近づくにつれ、小銃を持った14～15人ほどの兵卒に会い長髪族への守備に緊張感を感じている。

西門から城内へ入ると、右手に英清両兵の守備隊がおり、大砲も備えられているのを見ている。そして城内の町中を徘徊し、関聖廟へ。のち城内西北の聖廟へも寄って、再び西門へ戻り、城外を北上。英兵が小銃を持って守備している様子も見ている。そして城壁に沿って東方へ向かい、帰館している [図1]。

このコースはそれまでほとんど歩いておらず、初体験であり、それまで歩いた租界の一部の経験と合わせて、やっとこれで上海のほぼ全容を見ることができたということになる。

6月11日には、来訪者が退去した後の午後、宿から近い上海港のいわば運上所というべき「新関」へ出向いている。ここは英人42人、清人99、合わせて141人が上海港での関税徴取を担当しており、英人のトップは年洋銀8000の給料で、日本の4000両にあたと聞きとっている。なぜ英国がここを支配するようになったかは、納富の項で触れた。それに対して、日比野は、たとえ清国が利益を得ても、利を持って利とすべきでない。洋夷は利益を上げるために、よだれを流して万里の波濤を超えてきているのだ。交易和親を表向きにしながら夷狄を近づけるは聖人の戒めるところだと。貿易品のうちアヘンなど贅沢品はほんとうに必要なのかも検討すべきだと記している。初めて税関をめぐる国家間の支配関係を目の前にして、日比野は正義感を表明している。それは多分に攘夷思

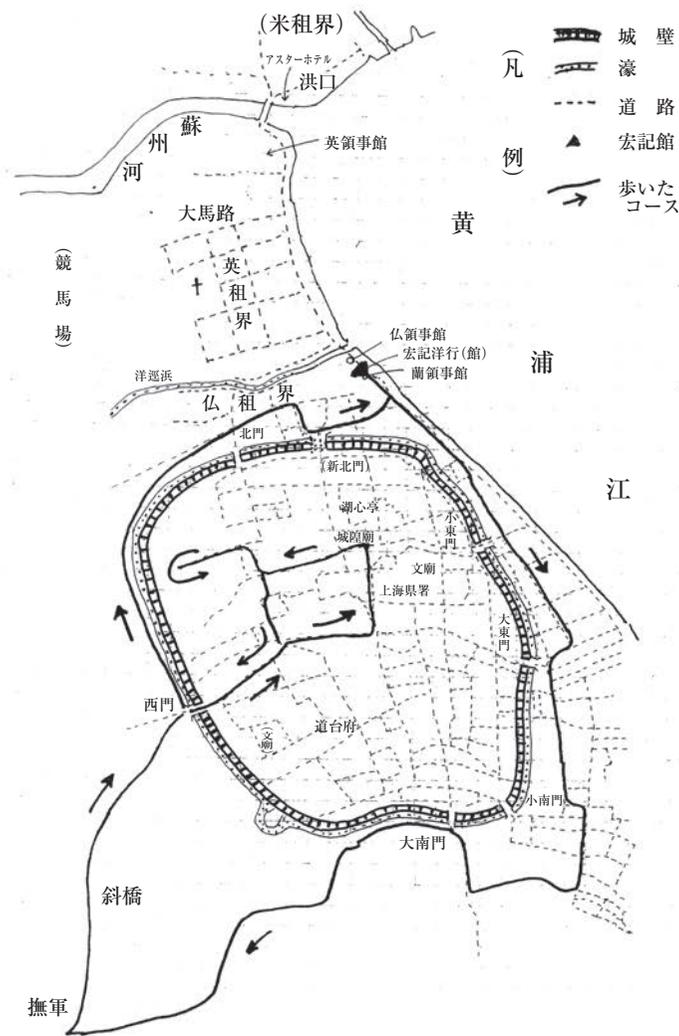


図1 日比野輝寛が6月7日に歩いて巡ったコース (藤田原図)

想と重なったともいえる。

その後は来訪者のラッシュと、一時の体調不良で、次に外出できたのは、帰国日程が決まった6月27日であった。

この時の行先は、午後の来客後で、西門外先の、先日見た斜橋の先に広がる李鴻章の陣営であった。見学を約束しながら、病でみられなかったのがやはり心残りであったのだろう。この時も約束してないため、外からの観察であった。しかし、同じグループの名倉予何人は別の日にしっかりとここを見学している。これについては別稿で報告したい。日比野はここで、陣営は四方を土塁で囲み、50間四方を1営だと聞き、それが1隊500人であり、斜橋には30営あ

るから合計15,000人が駐屯しているとみている。また野営時は3~4人で帆幕を設け、それを1棚と称すなど聞き取っている。そして操練をぜひ見たかったと悔やんでいる。

6月29日には英租界の大馬路へ英館の前を歩いていくと、袖を引くものがあり、ついていくと壮大美しい建物。そこは青楼で、楼内の美人の容姿に見とれたようだ。洋夷はここで遊ばず、広東夫人を妾にしていると聞いている。帰路、米屋で斗の大小を確認している。最後に案内人の謝礼にと烟管を渡している。

そして最後の6月30日、未明から昨日の大馬路へ向かい、両側に野菜と魚の市がひらかれ、物乞いや竹鳴らし、白玉砂糖水の売り声などでにぎやか、それは日本の繁華街と同じだと記し、朝の町の雰囲気を味わっている。そしてやはり本屋の志雅堂へ寄っている。

この午後、公役（幕府役人）に従い道台へ別れの挨拶に出かけている。再び砲とラッパの音にてむかえられ、珠門が開かれ、道台が出迎えて奥書院で茶菓の接待を受け、別れの会となった。

以上のように、体調不良と相次ぐ来客で、町歩きは自由にいかなかったが、思い切って全域歩きをし、租界歩きも試みており、それなりに上海の町を実感できたであろうことがわかる。特に、体調不良にめげず上海を何とか知りたい、またそこを通じて外国勢力に実情としくみを知ろうとした強い意志をくみ取ることができる。

#### ⑥ 長毛賊情報<sup>(39)</sup>

以上のような日比野の取り組みの中に、やはり上海で実感した初めての国際戦争状況については、日比野にとって他人事ではなく、その情報にはほかのメンバーも同様であったがより強い関心を持った。一部は（A）の納富の節でもふれたのでそれ以外についてみる。

5月21日には、宿の清人の話として、避難民は上海周辺で、陸上数十万人、船上に数万人いること、賊は道路をふさぎ交通を遮断するため、上海の米と粟がはなはだ乏しいこと、曾国荃は精鋭を率い勢力拡大中、賊の南京城も危急で、ここが落ちれば交通も自由になること、しかし、このまま続けば、1～2年で上海の餓死者がいく万人も出よう、などの情報を聞き取っている。

6月2日、友人が来て、城外で歩いていたら、避難民の死者を3人見たと。

6月4日、賊のトップで、陳王成が寿州でとらえられ、それがいうには、広西の梧州生まれ、14才から洪秀全に従い、金陵に出、英王となり、破竹の勢いで百戦百勝、負けた事はなかったと。敗軍の将は生を求めないと。したがって、金陵が危なくなると英王が投降したという前述の話は虚であったと。

6月5日、天津の戦の話も詳しく聞いている。英軍が敗れた後、英仏軍が攻めてくるというので清国軍はやってくる場所へ地雷を埋め、英仏軍の壊滅ができるはずだったが、地雷で家が大変になると考えた地元地主が密告し、英仏軍はそれを知り地雷を撤去し、勝利した。また船が浅瀬に乗り上げ、清軍の攻撃を恐れた英仏軍は白旗を掲げ、また「免戦」の旗も掲げて、清軍をだまし、突如清軍を攻撃して700人が死傷者となったと。

また大沽での英仏戦で良将の樂提督が落命し、僧王は通州へ撤退し大敗。清は1600万両の賠償金を支払うことになったという。これらが前述した上海の新関の主導権を英に奪われることにもつながったということにつながる。日比野はこれらの情報を通じ英仏の戦略に関心を持ったに違いない。

6月6日には、台湾で土匪の乱がおこったという情報も聞いている。

6月9日、来訪した施渭南は、長毛賊は大志なく、略奪するだけで、国家を憂うこともなしという、と記している。

6月13日、李鴻章軍は先月、兵200人で長毛賊数万を破ったと。そして今、李鴻章は南門外の斜橋に陣営を設け、長毛賊を防御していると。

6月23日、商人の張永福は洋涇浜（英仏租界の境界の水路）から洋貨を積んで船出し、天候悪化のため岸に近づいたら、数十人の賊に船もろとも奪われ、船は薪用に壊されたと。

6月25日、松江近くに賊の馬隊1000と歩賊無数との報を知り、英仏軍が陣営に進軍するのを、宿の前でみて、その行装を絵として記録している。

6月26日、長毛戦争の実録を読む。なぜこんなことになったかを汗を垂らして、書き写す。国家の一助になればと記し、日比野の気持ちがかがえる。そして清軍が衛城を攻め、賊軍は西門から逃走したとの報も記している。

6月27日、以前来訪した華翼綸は、清国は洋夷の機械は使わず、重い銃などを使う。洋夷の使う軍艦や火器は便利だが、それにより俗化してしまうから、清国が尊ぶのは信義だという。それについて日比野は信義を重んじるのは日本と同じだとし、言葉や服装などやたらに洋夷の真似はよくないと記している。上海での英仏清の具体的な接点の観察からの結論のように見える。

#### ⑦ そのほか

そのほか、貨幣の多様性のなかでの両替換算、重さや長さの単位が官と民で異なり、民の中でも職人や地方によっても異なっていること、曾國藩の活躍経過、各種の食品を中心に、書画や墨、弓などもその物価を町の店で調査していること。極めて多彩な関心だが、上海での暮らしへの関心である。

## 6. 終わりに

以上、幕末に幕府が初めて上海へ派遣した使節団のうち、従者の若者たち2人の上海滞在日記の内容を検討した。それらはそれぞれ個性があり、興味深い。それ以外の若者の日記も含めた日記の内容を大きく見ると、記録者の行動やその記録内容から、(A)、(B)、(C)の3グループに分けることができ、そのうちの二つのグループ、(A)からは納富介次郎、(B)からは日比野輝寛の日記を今回は取り上げた。そのうち納富は濁水を飲んだことによる体調不良で、途中からは部屋暮らしとなったが、その失点を跳ね返すべく、18歳の若さとは思えないほどの力量で、来訪客をはじめ、新聞などから上海情報を精一杯集めた努力が伝わってくる。一方、日比野も途中からコレラで倒れるが、回復すると、実際に町歩きも試みている。そして何よりも多くの清人が日比野を頼って来訪し、日比野を中心にした書画や書物を中心に議論する文化サロンが形成されたことである。この点は納富にも言えるが、日比野の来訪者は延べ100人近くに達し、納富への来訪者を大きく上回っている。そして噂を聞きつけた將軍や遠方からの学生も加わっている。

これらの背景には長毛賊との戦いとそれに伴う清朝政府の弱体化という混乱の中で、日本人が持つという超能力の噂話のレベルから、訪問を受けた上海道台が日本人一行を評価したように、実際の礼儀正しさと詩文や書画を理解できる文学にすぐれ、筆談もうまくできるなどまでの現地での日本人の評価がすぐに広がったためと思われる。日比野の来訪者数は日増しに増え、町歩きもままならなくなるほどであったが、日比野の農村藩出身ゆえの素朴さと性格の良さもあり、一段と清人に評価されたのであろう。それにしてもその情報の伝わり方の速さと正確さには注目され、清社会にはこの時期にもこのような庶民によるネットワークの形成されていたことがわかり、今日の中国もその延長上にあることがうかがわれる。また、折から長毛賊に追われた避難民が安全だと思われた上海に集まり、そ

の中のすぐれた人材が上海人以上に日本人との文化的交流を求めたこともわかる。長毛賊の乱は派遣団の何人かの若者には以上のような交流の上で幸運な面もあったといえる。

しかし、彼らが飛び込んだ上海は、まさにその長毛賊対英仏清軍との戦場に囲まれ、彼らは多くの情報を集め、目の前で展開する内乱の長毛賊と清軍という国内で対立する2派と英仏軍の入り乱れた複雑な国際戦に緊張しつつ、国際戦の実態を初めて観察することになったのである。日比野は日本国の一助になればとそれらの情報も集めたと記しているのは当然であったと思われる。この経験が帰国後 幕末さらに明治の時代に彼らをどのように対応さ



図2 1862年頃の上海地図(藤田原図)

せたかは興味のあるところである。

ところで、病状の重かった納富はもっぱら自室内で情報を得たために、記録の内容は時間軸が主であり、いっぽう、日比野はいったんコレラにかかるが、納富ほどではなく、来訪者が多かったため、十分とは言えないが、上海の城内や英仏租界の市街にも足を運び、町の広がりを観察している。時間軸と空間軸の両軸から上海を立体的にとらえることができたように思われる。記録からは、町全体として城内と城外のすみわけ、さらに城外でも英仏米租界と各地から避難してきた清人たちを加え50万人ともいわれ、その中にまだ定着に至らない多くの避難民が密集する居住地と数万人と言われた海上生活者の空間というすみわけがうかがわれた。そしてこの避難民の上海への集中が、まだ定着には至らないものの、この上海の人口を急増させ、上海の都市としてその後発展していく前景である初期条件を形成したものであると思われる。つまり、上海の19世紀後半からの発展は、この時点では貿易の発展というよりは太平天国・長毛賊の乱による上海への避難民の集中が契機となったことが、彼らの記録からわかるのである。図2は筆者が1862年頃を目途に作成した上海地図で、前掲図1もこの図をベースに作成している。曲がった輪状の部分が上海城の

城壁でありその外側を取り巻く点状の部分は外堀である。この内側は拠点になった城としての町であり、その北側の洋涇浜までが当時の仏租界、洋涇浜から北の蘇州河あたりまでが英租界で、その北が米租界で、こののちさらに西方へそれぞれ拡大していく。英租界の西側には最初の競馬場が早くも設けられている。図中の点線は道路を示し、町場空間と居住空間を示している。城内の道路の不規則的の形状と外側の租界の道路の計画的で規則的の形状とは対照的である。城壁からあふれ出た上海人は城壁の小東門外や大東門外の東側で、黄浦江沿いの間に居住し、多くの魚屋や雑貨屋などの店を並べていた。黄浦江へそそぐ北の蘇州河以北は洪口（虹口）地区でアメリカの租界になり、のちに日本も進出し、やがて英租界と合体して共同租界になる。前述したように図中の点線が示す道路は当時の上海の町の空間を示し、それはせいぜいこの道路網の広がる範囲の町であり、大きな町ではなかった。上海城の外の西側、南側、そして租界地になった北側も低湿地で、長毛賊の乱はこの租界とそこに続く低湿地に避難民を各地から入り込ませることになり、劣悪な避難民の居住環境だったことがわかる。しかし、英仏などの租界の拡大がのちにインフラの整備をすすめ、避難民の一部の居住の定着を可能にしていくのである。彼らの日記はその上海の出发点を記録できた点で貴重である。

いずれにせよ、彼らが派遣された上海は、日本では考えられない国際的要素を思い切り含んだモザイクで、戦争による難民の流入など刻々と変化するダイナミックな時空間にあった。それだけにそこでの行動や思考の記録の中で、それをどう解き明かし、ひも解いていったかは、20歳前後の若者たちであるとはいえ、自分の立ち位置も踏まえ対応したように見える。トップの官吏たちや長崎商人が対応した上海との初貿易や貿易協定の締結はうまくいかなかったが、若者たちはそのまじめさと好奇心が、清人との交流を活発にし、上海でのサロンづくりとそれに伴う人脈づくりには成果を上げたといえそうである。

最後に、納富は18歳、日比野は24歳という若さで、周囲の戦乱に囲まれた上海にとびこむことになり、不潔な環境の中、コレラに罹患しながらも、上海やそれに連なる清国の状況を見聞き観察して、しかも堂々と多くの清人文化人たちとも交流でき、これだけの記録を書いたことは驚嘆に値すると評価したい。それは幕末期の武士階層の若者が漢学の素養を持ち、さらにまだ初めて見聞いた列強との国際関係の日本への波及も予想し、その予兆さえ感じる不安な中で、冷静に客観的に目の前の事象をとらえようとし、選ばれてきた日本人という誇りを持って、現地での体験の中で対応したという力量の大きさを発揮したように思われる。それが、次の明治維新後の日本の近代化を可能にした原動力になったとも思われる。1890年に設立した日清貿易研究所から、さらに1901年に東亜同文書院を立ち上げていった荒尾精、近衛篤磨、根津一の3人も20歳代の若者の企画であり、実践であった。いずれも幕末期生まれの人材であり、あらためて幕末期あるいは幕府後期の士族などの教育環境と明治期につながっていく教育システムを検討しつつ、再評価する検討も必要のように思われる。

東亜同文書院設立後、清国や民国時代、さらに列強の植民地下にあった東南アジアで調査旅行を行い、すぐれた報告書を記録した書院生も、外地という初体験の世界に挑戦した

20～21歳の若者であった。そこには本論で取り上げた幕末に上海に派遣された若者たちの力量が投影されているようにも見える。

---

注

- (1) 高木秀和 (2013) 「明治時代における対清昆布輸出の状況—「支那経済全書」をもとに一」、同文書院記念報 [愛知大学]、Vol. 21, P.P. 133～141.
- (2) 榛名徹 (1987) 「一八六二年、幕府千歳丸の上海派遣」、田中健夫『日本前近代の国家と対外関係』、吉川弘文館刊、所収、P.P. 555～601、など。
- (3) 宮永孝 (1995) 『高杉晋作の上海報告』、新人物往来社、P. P. 24～38.
- (4) 外山軍治解説 (1946) 『文久2年 上海日記』、東方学術協会、全国書房刊、P. P. 2～4。その解説は本篇 P. P. 2～23…なお、この書には納富介次郎「上海雑記」、日比野輝寛「贅牘録」ほか収録されている。
- (5) 納富介次郎、前掲(4)の「上海雑記」による。
- (6) 日比野輝寛、前掲(4)の「贅牘録」による。
- (7) 名倉予何人 (1862) 「官船千歳丸 海外日録」(印影版)、『幕末明治中国見聞録集成』、第11巻、ゆまに書房、1997刊 P. P. 89～162。(なお、田崎哲郎 (1986) 「名倉予何人「海外日録」一文久2年千歳丸関係資料一」、愛知大学国際問題研究所紀要、83号、P. P. 91～118、が活字化している。)
- (8) 前掲(3)、P. 28.
- (9) 前掲(6)、P. 71. 5月17日。
- (10) 前掲(5)、P. 12.
- (11) 前掲(5). P. 13.
- (12) 前掲(6)、5月6日、P. P. 54～55.
- (13) 前掲(5)、P. 5.
- (14) 前掲(6)、5月6日、P. 53.
- (15) 前掲(7)、5月6日。
- (16) 前掲(6)、5月6日。
- (17) 前掲(5)、P. 6.
- (18) 前掲(6)、6月7日。
- (19) 前掲(5)、P. P. 7～8.
- (20) 前掲(6)、5月12日、5月13日、5月14日、5月15日。
- (21) 前掲(5)、P. 24.
- (22) 前掲(5)、P. 17.
- (23) 前掲(5)、P. 20.
- (24) 前掲(5)、P. 10.
- (25) 前掲(6)、5月8日。
- (26) 前掲(5)、P. P. 10～11.
- (27) 前掲(5)、P. 18.

- (28) 前掲(5)、P. 31.
- (29) 前掲(5)、P. 30～31.
- (30) 前掲(5)、P. 31～32.
- (31) 前掲(3)、P. 28.
- (32) 前掲(6)。
- (33) 前掲(3)、P. 29.
- (34) 前掲(6)、5月6日、7日。
- (35) 前掲(6)、5月8日。
- (36) 前掲(6)、5月9日。
- (37) 個々の内容については、日記の記録された月日を本文中に示したので、それに従い日記本体分を参照されたい。
- (38) 同上。
- (39) 同上。